

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

5. 広報・社会連携

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009600

概観

地域に根ざした広報活動

2015年に開業した大型複合施設エキスポシティ内にある吹田市情報発信プラザ「Inforestすいた」で1カ月間（3月24日～4月30日）、「みんなくフェア」を開催した。標本を模した制作物や手に取れる仮面（複製品）を展示するなど、研究・展示活動を発信し、本館の認知度向上と集客を図った（入場者数 47,910名）。

万博記念公園内の飲食店4店舗との観覧料及び飲食料等の相互割引を継続し、公園内における利用者の回遊性を高め、集客を図った。

北大阪8市3町の美術館・博物館計57館が参加する「北大阪ミュージアム・ネットワーク」による文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」に会場を提供するとともに、本館のブースを出した。他にもミュージアムぐるっとパス・関西2018に継続参加するなど、地域における美術館・博物館の活動における中心的役割を担い、注目度を増した千里を起点として発信する広報活動を展開した。

学校教育・社会教育活動

本館研究者の研究成果を幅広い層に社会還元するため、積極的なアウトリーチの講演活動を行った。主に社会人を対象とした生涯教育として、大阪梅田のグランフロント大阪において、連続講座「みんなく×ナレッジキャピタル」を「工芸継承—東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」のテーマで計4回開催した。テーマのうち1回は、本館展示ツアーとすることで、館外での催しを展示観覧につなげることを企画した（参加者数計 111名）。

さらに、新たな試みとして、本館オリジナルの映像作品である「みんなく映像民族誌」シリーズの作品を広報、普及するため、大阪市内にあるミニシアター「淀川文化創造館シアターセブン」において上映会を開催するとともに監修者による解説を行った。4回の実施で延べ275名の参加があり、本館への来館経験がない層に対し、本館の認知度を向上させた。

大阪府高齢者大学の講座（31回開催、参加者数計 1,302名）において、引き続き本館教員が講座を担当した。

千里文化財団の協力のもと、大学等教育機関との連携を図り、文化人類学・民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」を継続実施し、高等教育への本館の活用を促した。今年度は、新規加入1校（京都市立芸術大学）、継続加入7校（大阪大学、学校法人京都文教学園（京都文教大学・短期大学）、同志社大学文化情報学部・文化情報学研究科、千里金蘭大学、学校法人立命館（立命館大学、立命館高等学校、立命館宇治高等学校、立命館守山高等学校、立命館慶祥高等学校）、学校法人塚本学院（大阪芸術大学、大阪芸術大学短期大学部、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校）、京都大学）の申込があり、計2,365名の学生、教職員が来館した。また、本館の展示や館蔵資料を大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学生・教員のためのみんなく活用」を本館ウェブサイトに掲載するとともに、活用方法を紹介したリーフレットを作成し、全国の大学に配布した。2018年度は、本館を利用した大学教員による講義・講習が87件実施され、2,600名の学生等に展示場が利用された。

初等中等教育への貢献として、大阪北摂地域の中学校5校から13名を職場体験として受け入れたほか、学校教員を対象に、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツール、貸出用学習キットなどの紹介を目的としたガイダンスを1回実施し、35団体116名の参加があった。

学習支援の一環として、学校の授業で裁縫を習い始めた小学5年生以上を対象とした企画展関連「パッチワーク・キルトのある生活」を実施した。また、若い世代に対する特別展と本館展示の相互観覧による理解度の向上を目的に学校団体（高校、大学）に対する特別展観覧料の優待措置を継続した。

インターネットによる広報活動

インターネットによる情報発信とアクセシビリティを一層向上させた。ホームページに関しては、広報誌『月刊みんなく』の音声版データをホームページにアップしてPDF版の誌面と併せて視覚障害者や弱視等の方に対してのバリアフリー化を図る等リニューアルを重ねた。ホームページの利用者数は、訪問者数 925,822、ページビュー数 2,890,375であった。

メールマガジン（みんなく e-news）に関しては、利用者アンケートの結果等を参考に内容の見直しを図りながら、毎月1回継続して発信した（配信数は54,454件）。

ソーシャルメディアに関しては、利用者も順調に増加し、自前の広報メディアとして、着実に地歩を固めている。（Facebook いいね！数 15,389（累計）、Twitter フォロワー数 42,512（累計）、YouTube 総再生回数 18,173回

(2018年度)、Instagram いいね!数 6,069 (累計))。

マスメディアによる広報活動

新聞に関しては、産経新聞で、各展示場の目玉となる標本資料を紹介する記者による連載、毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」の連載を継続した。後者では、本館の研究者がそれぞれの研究内容を多様な年齢層、地域の読者向けにわかりやすく解説した。また、文部科学教育通信で月2回「国立民族学博物館の収蔵品」の連載も継続し、本館研究者が研究内容と本館収蔵資料について解説した。千里ニュータウンFM放送番組「ごきげん千里837 (やあ、みんな)」も継続している。

プレスリリースも随時発信し、マスメディアに情報提供した(年間25本)。報道関係者との懇談会・内覧会等は、年12回(参加者数147名)開催し、共同研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介した。30年度は、テレビ25件、ラジオ66件、新聞570件、雑誌126件、ミニコミ誌169件、その他204件の各媒体総数1,160件で、本館の活動が紹介された。

研究成果の社会還元及び教育普及活動

2018年度の館内における研究成果の社会還元及び教育普及活動については、6月に発生した大阪府北部地震の影響により、開催を延期したり、会場を変更したりするなどの対応が必要となったが、ほぼ年度当初の予定どおり実施した。

研究成果の社会還元として、継続して文化人類学・民族学の最新の研究成果を発信する「みんぱくゼミナール」を12回(参加者数 1,990名)、研究部のスタッフと来館者が展示場内でより身近に語り合う「みんぱくウィークエンド・サロン——研究者と話そう」を33回実施した(参加者数 1,283名)。みんぱくゼミナールにおいては生涯学習の促進のために10回参加毎に表彰を行っており、今年度は104名を表彰した。また、映画の上映に研究者の解説を加えた「みんぱく映画会」を9回(参加者数 1,871名)開催した。特に今年度は、日本財団助成手話言語学研究部門との協働により、日本全国に約14,000名(厚生労働省推計)いる「盲ろう者(視覚と聴覚両方に障害を持つ人達)」とその家族・支援者の日常生活を丁寧に描いた、世界にも類例のないドキュメンタリー映画「もうろうをいきる」を、視覚障害者対応音声ガイド及び「聴覚障害者対応日本語字幕(単なるセリフ字幕ではなく、生活音・環境音・BGMなどをも文字化して付与した字幕)」つきの完全バリアフリー版で鑑賞する機会を提供することによって、参加者に映像文化共有のあり方について新たな可能性を提示した。本企画では、手話通訳及び文字通訳を導入するとともに、パネルディスカッションにおいてはパネリストが視覚障害者に配慮した形で発言したり、健常者にも希望に応じて視覚障害者対応音声ガイドの体験を促した。質疑応答では、会場から健常者と聴覚障害者の若年層による積極的な質問があるなど、多様性の受容という今日的課題に対する体験と熟考の機会を提供することができた。

この他、2011年の東日本大震災以来、当館で継続してきた支援研究「東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究」から引き継いだ「東日本大震災等、大規模災害の記憶継承及び被災地における人間文化研究」及び特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」の関連企画である研究公演「東北の復興を願って——夢、希望、想いをこめて」(参加者数 188名)や企画展「旅する楽器——南アジア、弦の響き」の関連イベントとして、展示資料の一つであるサロドの生演奏に触れる機会を提供することで展示への理解を促進することを目的とした研究公演「薫り立つインド宮廷の華——弦楽器サロドの至芸」(参加者数 475名)、「音楽の祭日2018 in みんぱく」(参加者数のべ 5,420名)、本館が所蔵するアイヌの標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的として行う祈りの儀式「カムイノミ儀礼」(見学者数 316名)を実施した。さらに、特別展・企画展・展示イベントに関連するワークショップ、ゼミナール、ウィークエンド・サロンなど、多数のイベントを開催し、展示の理解を深めることに寄与した。

これらの活動は、みんぱくカレンダーやチラシを制作し、関係諸施設を通じて配布したほか、広報誌『月刊みんぱく』を国立民族学博物館友の会会員に配付するとともに、全国の研究機関、大学等に寄贈することによって、広く情報発信を行った。視覚障害者向けの同誌音訳版も並行して製作・配付した。

また、研究成果の社会還元及び教育普及活動における障害のある方への合理的配慮の提供について見直しを行い、聴覚障害者に対する対応が不足していたとの認識を得たことから、手話通訳を導入することを決定した。来年度以降本格実施する予定である。

その他の活動

学校を卒業した知的障害者に対し、博物館を開かれた学びの場として提供するため「みんぱく Sama-Sama塾」を試行的に実施した。今年度はワークショップを6回実施し、延べ201名の参加があった。ワークショップ当日の様子

やアンケート結果を元に知的障害者が博物館を活用する際に必要とされることや改善点などを探った。知的障害者にとって分かりやすく、利用しやすい博物館の活用モデルの構築に向けて、次年度も試行を継続する。

また、昨年度から実施している小・中学生の団体を対象とする観覧料割引券の配布を継続して行った。すなわち「遠足や校外学習で来館した小・中学生が割引券を持ち帰り、館での体験を家族等に話すことで、家族と再来館するきっかけとする」効果がみられたため、デザインを一部修正し、来年度以降も観覧料割引券の配布を引き続き行うこととしたものである。

高齢者や身体が不自由な方等多くの方が快適に来館できるよう、特別展会期中の土、日、祝日に大阪モノレール「万博記念公園駅」から本館まで無料のシャトルバスを運行した。

今後の課題

第三期中期目標・中期計画では、「社会との連携及び社会貢献」も大学共同利用機関の一つの使命となっており、本館は博物館施設という社会に開かれた装置をもつ強みを活かし、初等、中等教育も含めた一般社会への研究成果の発信を積極的に続けていくことが必要である。貸出用学習キット「みんぱく」の運用環境を充実させるとともに、社会人の学びなおしの機会でもあるボランティア活動の運営支援も引き続き推進していくことが望ましい。次世代電子ガイドシステムの開発においては、本年度に開発したプロトタイプをブラッシュアップし、利用者にとってより魅力的なものとなるよう、さらなる検討が望まれる。

研究成果の社会還元や教育普及活動においては、長年継続してきた既存の活動に加え、各種研究プロジェクトや外部資金による研究の成果を還元する活動を促進するとともに、本館の展示場や展示をより積極的に活用した普及事業の活性化に向けた検討が必要である。

また、本館の国内外における認知度向上や、より幅広い層へ研究成果を還元するため、引き続き館外における普及事業を推進していくことが必要である。さらに、人文知コミュニケーターの活用などを通じて、博物館社会連携事業の強化と大学等高等教育機関の共同利用性を高めるための新たな事業展開を図る必要がある。

国立民族学博物館要覧2018

- 和文要覧 2018年8月発行
- 英文要覧 2019年2月発行

ホームページ <https://www.minpaku.ac.jp/> (2019年3月31日現在)

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成している。

提供している主な情報は以下の通り。2018年度の訪問件数は925,822件。

• 研究活動

研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

• 博物館展示・事業活動

本館展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・ゼミナール・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

• 大学院教育

総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの情報。

• データベース

本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんぱく e-news」を発行し、毎月開催している「みんぱくゼミナール」、随時行われる「シンポジウム／

フォーラム」「研究公演」「みんなく映画会」「特別展」などのお知らせを、月1回電子メールで配信している。2018年度の配信数は54,454部。

報道

●報道関係者との懇談会

2018年4月19日	13名（8社）	企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて—そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」、みんなく映画会「少女は自転車にのって」、シンポジウム「デジタル写真データベースが拓く学術活動の未来—蓄積された画像資料をいかに活用するのか」、3次元CGで見せる建築データベース「東南アジア島嶼部の木造民家」の公開について、日本の文化展示関連情報データベースの公開についてほか
5月17日	12名（10社）	国内外に広がるビーズの輪、音楽の祭日2018 in みんなく、みんなく映画会 映画人類学フォーラム・国際シンポジウム「アフリカからのイメージの創造—映像人類学トロムソ学派の民族誌映画」ほか
6月27日	13名（8社）	大阪府北部地震に伴う被害の説明
7月19日	13名（10社）	地震被害からの復旧進捗状況について、学術潮流フォーラムⅡ学術資源研究開発センター・国際シンポジウム「ミュージアムの未来—人類学的パースペクティブ」、特別展「工芸継承—東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」ほか
8月22日	12名（8社）	展示場再開に向けた作業の進捗状況の説明、企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて—そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」展示ツアー
9月12日	19名（11社）	特別展「工芸継承—東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」報道・出版関係者向け内覧会
10月18日	10名（8社）	年末年始展示イベント「いのしし」、みんなく映画会「映画が拓く新たなバリアフリーの世界」、みんなく映画会「彷徨える河」、研究公演「東北の復興を願って—夢、希望、想いをこめて」、公開フォーラム「世界の博物館2018」、ミンパク オッタ カムイノミ、公開講演会「音楽から考える共生社会」、新任紹介ほか
11月15日	10名（9社）	年末年始展示イベント関連ワークショップ「かざってポン！へんしん いのしし」、今年度のみんぱく映画会／みんなく映像民族誌シアターについて、北大阪ミュージアムメッセほか
12月20日	11名（7社）	みんなく映画会「ママのお客」、年末年始展示イベント「いのしし」展示ツアー、新任紹介ほか
2019年1月17日	12名（11社）	特別展「子ども／おもちゃの博覧会」、企画展「旅する楽器—南アジア、弦の響き」、研究公演「薫り立つインド宮廷の華—弦楽器サロドの至芸」、第35回人文機構シンポジウム レクチャーコンサート「中東と日本をつなぐ音の道（サウンドロード）—音楽から地球社会の共生を考える」ほか
2月21日	14名（10社）	公開講演会「アンデス文明の起源を求めて—日本人研究60年の軌跡と展望」、特別研究 国際シンポジウム「Making Food in Human and Natural History」、企画展「旅する楽器—南アジア、弦の響き」展示ツアーほか
3月14日	8名（6社）	特別展「子ども／おもちゃの博覧会」報道・出版関係者向け内覧会

●新聞等報道件数

2018年度は、テレビ25件、ラジオ66件、新聞570件、雑誌126件、ミニコミ169件、他204件、計1,160件の報道があった。

月刊みんぱく

4月号 (第487号)	2018年4月1日発行	特集「障害で気づく、障害が築く」
5月号 (第488号)	2018年5月1日発行	特集「お金を数える」
6月号 (第489号)	2018年6月1日発行	特集「アーミッシュの生活と文化」
7月号 (第490号)	2018年7月1日発行	特集「モノに願いを」
8月号 (第491号)	2018年8月1日発行	特集「デジタルライブラリ DiPLAS」
9月号 (第492号)	2018年9月1日発行	特集「受け継がれる用の美」
10月号 (第493号)	2018年10月1日発行	特集「門付け再考——家を訪ねる芸能の諸相」
11月号 (第494号)	2018年11月1日発行	特集「動物福祉と動物倫理」
12月号 (第495号)	2018年12月1日発行	特集「1968と人類学」
1月号 (第496号)	2019年1月1日発行	特集「凧」
2月号 (第497号)	2019年2月1日発行	特集「南アジア、弦の響き」
3月号 (第498号)	2019年3月1日発行	特集「時代を映すおもちゃ」

みんぱくゼミナール

第479回 EEM という「運動」

【開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料」関連】

2018年4月21日

講師 松原正毅
野林厚志
丹羽典生

受講者 181名

内容 EEM (Expo'70 Ethnological Mission「日本万国博覧会世界民族資料調査収集団」) の主要なメンバーであった松原正毅先生 (本館名誉教授) をお迎えして、収集の様子や当時の裏話をお話しいただいた。

第480回 聖都エルサレム

2018年5月19日

講師 菅瀬晶子

受講者 389名

内容 聖地エルサレムがなぜ聖都と呼ばれ、なぜその帰属が問題となるのかを、パレスチナ・イスラエル双方の視点、さらにはアメリカで力を持つキリスト教右派の視点を比較しつつ、お話しました。

第481回 データベースのはしご

2018年6月16日

講師 山本泰則

受講者 161名

内容 みんぱくも開発に加わった人間文化研究機構の横断検索システム (<https://int.nihu.jp/>) のことを紹介した。

第482回 アーミッシュ・キルトを巡る旅——いくつもの人生物語へ

【企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」関連】

2018年9月8日

講師 鈴木七美

受講者 97名

内容 無地の服を着て馬車を駆るキリスト教再洗礼派アーミッシュが端切れでつくり、贈り物や支援品として人びとをつないできたキルトが紡ぐ物語についてお話しました。

第483回 特別展「工芸継承」からのメッセージ

2018年9月15日

講師 日高真吾

永山広樹（静岡文化芸術大学）

北村 繁（漆芸家）

受講者 190名

内容 世界にほこる日本の工芸品が、この精神を受け継ぎつつ、どのように挑戦するののかについて考えた。

第484回 工芸を語る——宮城の職人からのメッセージ

【特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」関連】

2018年10月20日

講師 日高真吾

永山雅大（東北工業大学）

宮城の工芸職人、関西の工芸職人

受講者 159名

内容 東北と関西で工芸の制作に励む職人たちをお招きし、現在の工芸、これからの工芸について考えた。

第485回 韓国の若者層がみた現代韓国——生きづらさを個人レベルでどうするか

2018年11月17日

講師 太田心平

受講者 170名

内容 地獄（ヘル）のように生きづらく、朝鮮（チョソン）時代さながらに旧態依然だという韓国で、若者層はそれらをどうやりくりしているのかについてお話した。

第486回 毛沢東バッジの過去と現在

2018年12月15日

講師 韓 敏

受講者 148名

内容 毛沢東の肖像が入ったバッジの関係者の語りをとおして、時代の装飾品の系譜とその意味の変化をお話した。

第487回 インターネットで神さまと『ともだち』になる——当世ヒンドゥー教事情

2019年1月19日

講師 三尾 稔

受講者 161名

内容 フェイスブックで「ともだち」を増やす神の事例を通じ、インドの宗教とメディアの関係について考察した。

第488回 インカ帝国から先住民共同体へ——植民地期アンデスにおける先住民の集住化

2019年2月16日

講師 齋藤 晃

受講者 174名

内容 16世紀末にスペイン人が旧インカ帝国でおこなった、集住化と呼ばれる先住民の強制移住について最新の研究成果を紹介した。

第489回 チャルメラ——過去から響く音

2019年3月16日

講師 寺田吉孝

受講者 160名

内容 人生儀礼、祭礼、演劇などの不可欠な伴奏楽器として世界各地で演奏されてきたが、現在では次第に使

われなくなっているチャルメラの現状についてお話しした。

みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

第505回 2018年4月1日 「田の神（タノカンサア）」について

講師 日高真吾

受講者 63名

内容 全国に分布する田の神信仰のなかで、鹿児島県から宮崎県西部の一部の地域に分布する石で作られる田の神（タノカンサア）は、南九州独特の文化として知られている。ここでは、展示しているタノカンサアを中心に、豊穣を願う田の神信仰について紹介した。

第506回 2018年4月8日 東アフリカ民族資料収集の舞台裏

講師 川瀬 慈

受講者 46名

内容 東アフリカの民族資料の収集については、収集責任者であった片寄俊英という人物にふれないわけにはいかない。このトークでは、片寄が東アフリカにおいて収集した資料やアフリカ現地から梅棹忠男宛に送った手紙などをもとに、1960年代の収集状況を振り返った。

第507回 2018年4月15日 収集団の見た独立期のオセアニア

講師 丹羽典生

受講者 48名

内容 EEM 収集団は、オセアニアでの民族標本収集にあたり、ひろく太平洋地域をめぐる。当時のオセアニアは本格的な脱植民地期を迎えており、彼らも国の移行期をつぶさに観察していた。本サロンでは、そうした当時の状況及び収集とそれに関わるエピソードを紹介した。

第508回 2018年4月22日 インド・中近東収集から時代を読む

講師 南 真木人

受講者 53名

内容 インド・中近東で収集を担った高山龍三氏から伺った回顧談や当時の報告書を基に、1970年前後という時代を読み解いた。インド・中近東における動乱期前後ともいえる東の間の平穏、高度経済成長期の日本と選ばれた人びとの奮闘、国民の高揚などを考えた。

第509回 2018年4月29日 1960年代末のメキシコとコロンビア——EEM 中南米の旅

講師 鈴木 紀

受講者 42名

内容 EEM (万博資料収集団) の一環として、1968年から69年にかけて、中米のメキシコとグアテマラ、南米のコロンビアを中心とする5カ国で資料収集が行われた。当時の記録を基に、波乱にとみ、知的に豊穣だった中南米の収集旅行の足跡をたどった。

第510回 2018年5月6日 専門家が専門外に手を伸ばすとき——アフガニスタンから来た偶像

講師 吉岡 乾

受講者 54名

内容 研究者は何かの学問分野の専門家でしかなく、その分野から外れたら一介の門外漢に過ぎないのは自明である。とはいえ職業柄、専門外に手を伸ばさざるを得ない状況というものも訪れる。アフガニスタン由来のEEM資料「祖先像」を例に、研究者の苦悩を紹介した。

第511回 2018年5月13日 1960年代のアフリカ

講師 三島禎子

受講者 25名

内容 1960年は「アフリカの年」として知られ、多くのアフリカ諸国が独立を果たした。しかし脱植民地化は

難航し、多くの国々が経済の停滞や衰退を経験した。アフリカをめぐる先進諸国の援助合戦と、それによってもたらされた弊害などについて紹介した。

第512回 2018年5月20日 自由への渴望と抑圧——1960年代の東ヨーロッパ

講師 新免光比呂

受講者 44名

内容 ヨーロッパが東西に分断されていた1960年代、そこでは自由と民主主義という言葉がリアリティをもっていた。東ヨーロッパの人びとは何を求め、どんな暮らしをしていたのか。ルーマニアを例に考察した。

第513回 2018年5月27日 失われつつあるものを、かき集めた——日本資料の紹介

講師 卯田宗平

受講者 53名

内容 万博開催のために収集された日本関係の資料は、水田稲作や畑作で使われる生業道具、暮らしのなかの生活用品、各地に残る信仰や芸能にかかわるものなど、日本社会が過去から受け継いできたものが多くみられる。本発表では、50年ほど前に収集された日本資料の紹介を通して、1960年代の日本を考察した。

第514回 2018年6月3日 みんなくの元気なボランティア——MMPとみんなく

講師 出口正之

受講者 26名

内容 みんなくには、MMP（みんなくミュージアムパートナーズ）という名前のボランティアの方々が活躍している。「ボランティアの活躍が、日本の高齢社会にとっても重要な役割を果たしていることをアピールしてほしい」というMMPの方々の声とともに、ボランティアについて紹介した。

第515回 2018年6月10日 亜麻箆笥の世界

講師 森 明子

受講者 22名

内容 ヨーロッパ展示場に、亜麻つくりや亜麻製品とともに、亜麻箆笥が展示されている。亜麻箆笥は女性の財産で、繊維から撚った糸や、糸から織った布をいっぱい保管し、また、扉の内側には巡礼の思い出なども飾った。亜麻箆笥の内に、往時の女性世界を考察した。

第516回 2018年8月26日 キルト・ストーリーが紡ぐ世界

講師 鈴木七美

受講者 76名

内容 聖書に基づき簡素な生活を旨とするアーミッシュは、無地の服を着て馬車に乗り、電気や電話の使用を制限し続けている。彼らが生活用品としてつくってきたキルトに込められた日々の暮らしや世界との交流の物語を紹介した。

第517回 2018年9月16日 ビーズからみた人類史

講師 池谷和信

受講者 65名

内容 ビーズは、人類が生み出した最初のアートといわれる。同時に、世界の歴史をみとみるとビーズをまったく持たない文化はないといってよいほど継続してみられる。その素材は、木の実、植物の種、動物の歯や骨、貝殻、卵殻、石や金や琥珀、鉄、ガラスなど多様である。ここでは、ビーズからみた人類史を展望した。

第518回 2018年9月23日 平成の百工比照コレクションについて

講師 日高真吾・加藤謙一（金沢美術工芸大学）

受講者 28名

内容 金沢美術工芸大学には、全国各地の工芸品の工程・技法・製品の各種見本や道具、材料などで構成される「平成の百工比照」が収集されている。ここでは、学生がいつでも観察できるように工夫された収蔵

展示について解説した。

第519回 2018年10月7日 バリアフリー映画を楽しむ

講師 飯泉菜穂子

受講者 15名

内容 障がいがあろうとなかろうと誰もが「一緒に」映画館で映画を楽しむ。そんな時代がきていることを紹介した。「聴覚障害者向けバリアフリー日本語字幕」「視覚障害者向けバリアフリー日本語音声ガイド」も体験した。

第520回 2018年10月14日 漆芸の業を受け継ぐ——北村家4代の作品から

講師 日高真吾・北村 繁（漆芸家）

受講者 36名

内容 明治初頭から現代まで続く北村家の漆工芸は、時代の移り変わりや人びとの生活が変化していくなかで、産業としての漆工芸から次第に美術工芸へと移り変わってきた。家業として漆工の技を受け継いできた北村家4代の作家による作品について解説した。

第521回 2018年10月21日 ベトナム、黒タイの暦

講師 檜永真佐夫

受講者 35名

内容 ベトナム西北部の盆地民、黒タイには独自の暦がある。その暦は生活の中でどのように用いられ、村の人たちはどのような時間サイクルの中に生きているのか。ベトナムの暦法や記念日との関わりも含め紹介した。

第522回 2018年11月4日 カザフ伝統医療の世界

講師 藤本透子

受講者 35名

内容 カザフスタンの草原の村では、子どもが病気になったときや、なぜか体調がすぐれないときなどに、エムシと呼ばれる治療者を頼ることがある。民間の治療者として生きる女性たちについて紹介しながら、現代における伝統医療の社会的背景について考察した。

第523回 2018年11月11日 ヒンドゥー教の「新年」?

講師 三尾 稔

受講者 20名

内容 毎年11月頃に北インドを中心に祝われるディワリー祭の祭礼は「インドの新年」とも言われる。一方、インドには新年とされる日が他にいくつもある。なぜそうなるのか? ディワリーの行事を紹介しながら、インドの季節感と「新年」について考察した。

第524回 2018年11月25日 市民参加型ワークショップ「現代に活かす伝統の手わざ」から考えるインダストリアルデザイン

講師 日高真吾・小谷竜介（東北歴史博物館）

受講者 42名

内容 東北歴史博物館の市民参加型ワークショップ「現代に活かす伝統の手わざ」は、工芸指導所の試作品を参考に、「くらしを豊かにする工芸、持つことで楽しくなる工芸」をコンセプトとした作品を制作した。ここでは、制作された作品からインダストリアルデザインを考察した。

第525回 2018年12月2日 ボリビア・アマゾンの旅

講師 齋藤 晃

受講者 27名

内容 南米大陸の中央に位置するボリビアは、アンデス高地の国として知られているが、実際には国土の6割

が低地で、その大部分がアマゾン川流域である。このアマゾン低地を旅する方法を、川と陸と空という3つの移動経路に焦点を当てて紹介した。

第526回 2018年12月9日 声の力——新聞連載を通じて考えたこと

講師 廣瀬浩二郎

受講者 37名

内容 2018年7月～12月、日経新聞で毎週、コラムを担当した。連載をとおして意識し続けたのは「声が聞こえるような文章」を書くこと。今回は拙文を素材として、文字と声の関係について多角的に考えた。

第527回 2018年12月16日 ザンビア、チェワの村での暮らし

講師 吉田憲司

受講者 35名

内容 1984年以来、ザンビア東部のチェワの人びとの村、カリザ村で暮らしながら、仮面の儀礼やキリスト教聖霊教会の動向についてフィールドワークを続けてきた。通算すると6年間くらい村で暮らしたことになる。これまでの村での暮らしについて紹介した。

第528回 2018年1月6日 食のグローバル化——アメリカ大陸からの発信と受容

講師 關 雄二

受講者 35名

内容 現代人の食生活は、農耕を生み出した古代文明の恩恵にあずかっている。一例としてアメリカ大陸原産の栽培植物や、外来の食用植物でアメリカ大陸を代表するものなどを紹介し、食のグローバル化を考察した。

第529回 2018年1月13日 岩手県の鹿踊り

講師 林 勲男

受講者 33名

内容 2011年3月の東日本大震災発生によって、文化も大きな影響を受けた。みんなくは被災地の博物館や資料館への支援に加えて、その土地で伝えられてきた民俗芸能再生の支援もしてきた。今回は、岩手県の鹿踊りに焦点をあてて紹介した。

第530回 2019年1月20日 インドの子育て——授乳編

講師 松尾瑞穂

受講者 12名

内容 近年では産後すぐの母乳育児が推奨されているが、人工乳がなかった時代はどうしていたのか。インドでは、乳が出にくい場合は、乳の出を良くする食物を取ったり、マッサージをしたり、祈願をしたりする。日本ではもらい乳という習慣があった。世界の授乳慣行について紹介した。

第531回 2019年1月27日 ラフラン諸島をさがす

講師 山本泰則

受講者 26名

内容 数年前、みんなくが所蔵する標本資料「ジョージ・ブラウン・コレクション」の収集地を地図にプロットした。収集地の地名をインターネットや地図帳で探して、その緯度経度を調べた。最後まででこずったのが「ラフラン諸島」の位置だった。今回はそのときの苦労を紹介した。

第532回 2019年2月3日 はじめにヒモありき——人類の線状物利用

講師 上羽陽子

受講者 25名

内容 人類は植物を利用してどのようなものづくりをしてきたのか。マダガスカル中央高地ザフィマニリと西ティモールの事例から、人類が最初につくりだしたであろうヒモ的線状物の利用について紹介した。

第533回 2019年2月17日 カフィル・カラ遺跡(ウズベキスタン)におけるゾロアスター教関連の木彫り板絵の発見

講師 寺村裕史

受講者 36名

内容 ウズベキスタンに所在するカフィル・カラ遺跡の発掘調査(2017年度)で、ゾロアスター教の女神ナナーに、火や供物、音楽を捧げる様子を描いた木彫りの板絵が発見された。ウズベキスタン国内でも初となる、ほぼ完全な形で発掘された板絵の図像について紹介した。

第534回 2019年2月24日 収蔵庫を窓からのぞいてみよう

講師 園田直子

受講者 51名

内容 展示、貸出、閲覧・調査など、さまざまな場面で活用されるみんなの資料。資料の保管場所である収蔵庫はどのようになっているのか。収蔵庫を実際に窓から見ながら、みんなくで進めている収蔵庫の改修・再配架計画を紹介した。

第535回 2019年3月3日 現代イスラームと預言者ムハンマド

講師 相島葉月

受講者 53名

内容 イスラームの預言者ムハンマドは、世界中のムスリム(イスラーム教徒)に「歩く聖典クルアーン」として慕われている。クルアーンとムハンマドの関係とは? グローバル化する世界において、ムハンマドを「善き手本」として生きるムスリムたちの営為に迫った。

第536回 2019年3月24日 民族学博物館におけるカルチャル・センシティビティへの配慮

講師 伊藤敦規

受講者 26名

内容 アメリカ先住民の人びとと資料の熟覧調査をしたところ、いくつかの資料について宗教的・文化的理由から展示や画像公開を控えて欲しいという要望が寄せられた。こうした意見への北米の博物館やみんなの対応を紹介しながら、民族学博物館の役割を考察した。

第537回 2019年3月31日 特別展「子ども／おもちゃの博覧会」を巡って

講師 笹原亮二

受講者 59名

内容 2019年3月21日から5月28日まで開催の特別展「子ども／おもちゃの博覧会」について、展示のねらい、展示の構成、展示資料などについて紹介した。

研究公演

特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」関連

「東北の復興を願って——夢、希望、想いをこめて」

2018年10月28日

司会 日高真吾

出演 濱守栄子(シンガーソングライター)

絵美夏(ヴァイオリンシンガー)

中澤宗幸(弦楽器製作家・修復家)

参加者 188名

内容 特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」の関連企画として、復興の途につきつつある東北被災地のさらなる復興を願い思いを寄せることをテーマに、三陸沿岸にゆかりのあるアーティストをお招きしてコンサートとトークショーをおこなった。

企画展「旅する楽器——南アジア、弦の響き」関連
「薫り立つインド宮廷の華——弦楽器サロートの至芸」

2019年3月2日

司会 寺田吉孝

解説 田森雅一

出演 イルファーン・ムハンマド・ハーン、スバジット・ブラーマチャリー

参加者 475名

内容 企画展「旅する楽器——南アジア、弦の響き」の関連企画として、現在の北インド古典音楽に欠かせない弦楽器の一つであるサロートの演奏家で、伝統的な流派の家元であるイルファーン・ムハンマド・ハーン氏をお招きしてのコンサートと専門家による解説をおこなった。

みんなく映画会

2018年11月24日

映画が拓く新たなバリアフリーの世界『もうろうをいきる』

司会 飯泉菜穂子

登壇者 西原孝至（映画監督）

山上徹二郎（NPO法人メディア・アクセス・サポートセンター（MASC）理事長、株式会社シグロ代表／映画プロデューサー）

大河内直之（東京大学先端科学技術研究センター特任研究員、NPO法人バリアフリー映画研究会理事長）

川瀬 慈

参加者 137名

内容 日本全国各地に暮らすさまざまな世代の盲ろう者8人とその家族・支援者の日常生活を丁寧に取材したドキュメンタリー映画『もうろうをいきる』を上映し、映画監督、プロデューサーを交え、盲ろう者の世界についてのみならず映像文化の共有のあり方・映画を通じて示される新しいバリアフリーの世界についてのトークセッションをおこなった。

みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈人類の未来〉

〈人類の未来〉をキーワードに、研究者による解説付きの上映会「みんなくワールドシネマ」を実施。

2018年6月9日

「少女は自転車にのって」

司会 鈴木 紀

解説 菅瀬晶子

参加者 378名

内容 サウジアラビア＝ドイツ合作の「少女は自転車にのって」を上映し、明朗活発な10歳の少女ワジダの日常生活や願いをとおして、サウジアラビアにおける女性の状況について考えた。

2018年9月24日

「僕たちの家に帰ろう」

司会 鈴木 紀

解説 小長谷有紀

参加者 328名

内容 中国映画「僕たちの家に帰ろう」を上映し、ユグル族の兄弟が、離れて暮らす両親の元へ向かう道中で出会う人びとや出来事とおして、現代が失いつつある民族の文化、自然環境について考えた。

2018年11月4日

「彷徨える河」

司会 鈴木 紀

解説 八木百合子

参加者 303名

内 容 コロンビア映画「彷徨える河」を上映し、アマゾン流域の奥深いジャングルに住む先住民の視点で描いた“秘境”をとおして、彼らの知恵や自然と人間との関係について考えた。

2019年2月23日

「ママのお客」

司 会 菅瀬晶子

解 説 藤元優子

参加者 450名

内 容 イラン映画の名作「ママのお客」を上映し、突然のお客様を隣近所の人びとがこぞって協力し合い準備するおもてなしの食卓をとおして、イランの人びと、その日常生活や社会について考えた。

みんなく映像民族誌シアター

本館オリジナルの映像作品である「みんなく映像民族誌」シリーズのなかから選定した作品を上映後、監修者による解説をおこなった。

2019年1月12日

「カラハリ砂漠のトランスダンス」

司 会 福岡正太

解 説 池谷和信

参加者 62名

2019年1月26日

「ネパールの30年」

司 会 福岡正太

解 説 南 真木人

参加者：81名

2019年2月9日

「アリラン峠を越えていく——在日コリアンの音楽」

司 会 寺田吉孝

解 説 高 正子（神戸大学）

安 聖民（パンソリ演奏家）

参加者 70名

2019年2月17日

「中国雲南省大理盆地の回族」

司 会 福岡正太

解 説 横山廣子

参加者 62名

博物館社会連携

●学習キット「みんなぱっく」

学校や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として、学習キット「みんなぱっく」の貸し出しを実施している。みんなぱっくは世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2019年3月現在で15種類26パックを用意している。

名称	個数	2018年度貸出件数	2018年度利用者数
極北を生きる	2	15	1,624
アンデスの玉手箱	2	25	2,463
ジャワ島の装い	1	10	657
イスラム教とアラブ世界の暮らし	1	11	1,426
ソウルスタイル	2	13	1,541
ソウルの子ども時間	2	9	1,252
インドのサリーとクルター	2	21	2,627
ブリコラージュ	3	0	0
アラビアンナイトの世界	2	10	1,581
アイヌ文化にであう	1	13	1,340
アイヌ文化にであう2	1	11	782
モンゴル	2	32	5,345
あるく、ウメサオタダオ展	1	8	715
世界のムスリムの暮らし1	2	14	1,308
世界のムスリムの暮らし2	2	12	1,935

●ワークショップ

開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんなぱくへ——70年万博収集資料」関連ワークショップ

「あつまれ！みんなぱく資料調査収集団——EEM収集ミッションに迫る！」

実施日：2018年4月28日(土)

講師：野林厚志

鈴木 紀

吉岡 乾

参加人数：16名

開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんなぱくへ——70年万博収集資料」に関連したワークショップ。特別展示場に展示された資料をEEM収集当時の分類項目を元に観察することで、特別展テーマへの理解を深めた。

企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて——ここに暮らし、そして生きる人びと」関連ワークショップ

「パッチワーク・キルトのある生活」

開催日：2018年9月23日(日・祝)

(7月22日(日)から台風のため延期)

講師：黒羽志寿子(キルト作家)

鈴木七美

参加者：午前の部 19名

午後の部 20名

企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らし、そして生きる人びと」に関連したワークショップ。企画展観覧後、パッチワーク・キルトの制作を体験することで、アーミッシュの文化について理解を深めた。

●ワークシート

テーマに沿って展示場を見学できるガイドマップ「みんなぱく見どころアラカルト」など、テーマに沿って本館展示場を見学できるもの、特別展や企画展にまつわるもの、自主学習ができるものなどを作成している。これらは当館のホームページ上に掲載しており、ダウンロードして利用できる。

2017年度は、全展示場の新構築完了に伴い新しい展示場に対応するワークシートを開発するため、新たに立ち上げた「社会連携事業検討ワーキング」において、昨年度実施したプロトタイプの利用アンケート結果を基に、プロトタイプと既存ワークシート全体の見直しに着手し、基本方針とコンセプトを固めた。来年度からプロトタイプの再編集や既存ワークシートの改訂を行う予定である。

また、本館が提供しているワークシートの利用率を向上させるため、本館ホームページを改良し、ワークシートの検索の利便性を高める工夫を施した。

●アウトリーチへの取り組み

近年、本館が実施するワークショップのアウトリーチ活動への要望が館の内外から増えてきたのを受け、昨年度決定したアウトリーチ活動を行う際の条件等に基づき、京都市勤業館みやこめっせにて開催された「ミュージアムキッズ！全国フェア in KYOTO 2018」においてワークショップ「ビーズの素材に注目！——ペーパービーズをつくろう」を実施した。当日の様子は専門誌「ミュージアムキッズ！」で紹介され、数ある参加団体の中から本館の企画が大きく取り上げられた。

●社会連携事業検討ワーキング

本館の博物館社会連携活動を強化するため、博物館活動に関する専門的知識を有する特任専門職員を配置し、今年度新たに配置された人文知コミュニケーター及び社会連携担当の機関研究員をメンバーに加えた「社会連携事業検討ワーキング」を立ち上げ、活動を強化するための体制を整備した。今年度はアウトリーチプログラム及びワークシートの充実に向けた検討を開始したほか、大阪大学との連携協定に基づき、日本と世界の民族文化の多様性と共通性を学び、文化の展示と表象をめぐる諸問題について考える機会を提供することを目的として、大阪大学の全学生を対象としたスタディ・ツアーのプログラムを策定した。

●みんなく春と秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス

春のガイダンス 2018年4月4日(木)、5日(金)

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを春に実施し、46団体149名の学校関係者が参加した。

当ガイダンスでは、遠足や校外学習など、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介したほか、見学に関するさまざまな相談も受けた。

秋は、2018年6月に発生した大阪府北部地震の影響で臨時休館となった時期に重なったため実施せず、個別対応とした。

●職場体験

2018年10月16日(火)～11月14日(水)

学校教育及び社会教育における体験活動の促進を図り、中学校等の生徒の社会性を育む観点から、中学生に「職場体験学習」の機会を提供しており、2018年度は5校13名を受け入れた。

その他の事業

●「ミュージアムぐるっとパス・関西2018」

関西地区の美術館・博物館の宣伝・広報と新規需要の掘り起こし、関西文化の振興等を目的として、実行委員会世話人会の一員として参画した。

●「音楽の祭日2018 in みんなく」

実施日：2018年6月17日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、2002年から日本でも「音楽の祭日」として開催されるようになり、当館もその趣旨に賛同し音楽を愛する一般市民に広く当館を解放して開催することとなった。当日は25のグループや個人の演奏があった。

●カムイノミ

実施日：2018年11月8日

カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」という意味であり、その実施は本館が所蔵するアイヌ標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としている。以前は萱野 茂氏（故人）を祭司に非公開でおこなわれていた。2007年度からは、社団法人北海道ウタリ協会（現 公益社団法人北海道アイヌ協会）の会員がカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施し、2018年度は八雲アイヌ協会及び苫小牧アイヌ協会の協力を受けた。

●北大阪ミュージアムメッセ

2018年11月17日（土）、11月18日（日）に、北大阪の8市3町の美術館・博物館の文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」を本館にて開催し、展示やワークショップ、楽器の演奏等がおこなわれた。

●連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」

一般社団法人ナレッジキャピタルとの間に取り交わした連携協力協定に基づき、グランフロント大阪において、特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」の関連事業として4回（うち1回は展示ツアー）開講した。

ボランティア活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自律的な組織として2004年9月に発足した団体であり、本館は、市民活動の場として、MMPの活動を支援している。

2018年度は、総勢140名を超えるMMPメンバーの自己研鑽のための支援として、特別展及び企画展の概要説明会（4回）、本館の教員による継続研修「来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座」（4回）を行った。さらに、新規メンバーに対しては、活動にあたり必要な知識を得るための研修（全3回）を実施し、そのうち1回は外部講師を招いている。以上の支援により、MMPは、本年度、展示場内における視覚障害者の展示体験をサポートするプログラム「視覚障害者案内」を22回（案内数152名）、主に小学生を対象とした体験型見学プログラム「わくわく体験 in みんぱく」を13回（プログラム参加者数1,125名）、その他一般来館者を対象とした各種ワークショップ（「点字体験ワークショップ」12回、年末年始展示イベント「いのしし」におけるワークショップ2回、その他のワークショップ8回）を実施した。また、開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料」の体験コーナーにおいては、6,500名を超える観覧者のプログラム体験をサポートした。さらに、館外で開催されたボランティアフェスタへも参加するなど、本館の外での活動にも積極的に取り組んでおり（ワークショップ5回）、博物館を起点とした社会連携を推進している。

一般財団法人千里文化財団の事業

●国立民族学博物館友の会講演会（協力：国立民族学博物館）

◎大阪：国立民族学博物館 セミナー室（毎月第1土曜日開催）

第476回「文化遺産としての日本万国博覧会——人類と進歩の調和を再考する」

【開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料」関連】

2018年4月7日 講師 鈴木 紀（民博准教授） 参加人数 51名

70年万博開催時に収集された民族資料と太陽の塔を手がかりに、万博のテーマ「人類の進歩と調和」の意味を再考した。

第477回「富士山——水と世界遺産を考える」

【第79回体験セミナー関連／みんぱく名誉教授シリーズ】

2018年5月5日 講師 秋道智彌（山梨県立富士山世界遺産センター所長、民博名誉教授）

参加人数 54名

2013年6月22日にユネスコの世界遺産に登録された富士山。富士山の水と生活や文化、信仰との関わりの歴史を振り返り、世界遺産としての意味を考えた。

第478回「カフィル・カラ遺跡とゾロアスター教——発掘調査で出土した木彫り板絵から読み解く」

2018年6月2日 講師 寺村裕史（民博准教授） 参加人数 50名

ウズベキスタンにあるカフィル・カラ遺跡から発掘された木彫り板絵を手がかりに、図像から当時の文化背景を読み解きながら、遺跡の性格について考えた。

第479回「日本人のブラジル移住とコーヒー文化の逆流——カフェパウリスタ箕面喫店を中心に」

【みんぱく名誉教授シリーズ】※第2土曜日に開催

2018年8月10日 講師 中牧弘允（千里文化財団理事長、吹田市立博物館長、民博名誉教授）

参加人数 22名

ブラジルサンパウロ州政府からコーヒー豆の無償提供されたカフェパウリスタがオープンしたことを期に広がる日本のコーヒー文化について紹介した。

※2018年7月は大阪府北部を震源地とする地震の影響に伴う民博の臨時休館（6月18日～8月23日）のため、友の会講演会は実施しなかった。また、8月はニフレルを会場に講演会をおこなった。

第480回「絶滅危惧生物と人の交わり——捕獲、鑑賞、保全を中心に」

2018年9月1日 講師 岸上伸啓（人間文化研究機構理事、民博教授） 参加人数 35名

北アメリカに生息するホッキョククジラやラッコ、ホッキョクグマを例にあげ、絶滅危惧生物と人の交わりを歴史的な視点から考えた。

第481回「地球時代の片隅で——あるインディアンとウミガメの物語」

2018年10月6日 講師 高木 仁（民博外来研究員） 参加人数 33名

大航海時代に英国の保護下にあったカリブ海で暮らすインディアンたちを例に、稀少動物のアオウミガメと人との関わりを、研究成果を紹介しながら考えた。

第482回「震災を経ても土地に生きる——南三陸町波伝谷、12年間の映像記録を通して」

【特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」関連】

2018年11月3日 講師 我妻和樹（映画監督）日高真吾（民博准教授） 参加人数 45名

東日本大震災以前から南三陸町波伝谷を撮り続けている映画監督を招き、人びとが災害を経ても土地に生きること、地域とともに生きることがもつ意味を考えた。

第483回「アーミッシュの信仰と文化——歴史から現代へ」

【企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」】

2018年12月1日 講師 踊 共二（武蔵大学教授） 参加人数 84名

17世紀のスイスに起源をもち、現在は北米の田園地帯に暮らすアーミッシュ。来歴とともに、習慣や物質文化の紹介をとおして、その暮らしぶりを紹介した。

第484回「南の島の贈りもの、民博からのお返し——研究成果の現地還元とは」

【みんぱく名誉教授シリーズ】

2019年1月5日 講師 須藤健一（堺市博物館館長、民博名誉教授） 参加人数 51名

人類学者と被調査者との関わり方について再考を促した。調査で得た情報や知識や技術や資料を現地の人びとにどのような形で還元できるのかを考えた。

第485回「アンデスの箱型祭壇が伝えるもの——農村の生活から歴史記憶まで」

2019年2月2日 講師 八木百合子（民博助教） 参加人数 49名

ペルーの民衆芸術のひとつ箱型祭壇。祭りや生活風景、農民が犠牲になった歴史を物語るこの祭壇から、同地の歴史と作品が生まれる背景について紹介した。

第486回「キリスト教で読み解く韓国の歴史と文化」※第2土曜日に開催

2019年3月9日 講師 太田心平（民博准教授） 参加人数 43名

宗教をもつ者のうち、約半数がキリスト教徒である韓国。キリスト教が普及した背景とともに、キリスト教を手がかりに韓国の近現代史や若者たちの生き方について紹介した。

●国立民族学博物館友の会 東京講演会（協力：国立民族学博物館）

◎東京：モンベル御徒町店

第122回「のこされたミッション——EEM（万博資料収集団）からみんぱくへ」

【開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料」関連】

2018年4月14日（土）講師 野林厚志（民博教授） 参加人数 28名

70年万博開催当時、太陽の塔の地下に展示された世界各地の民族資料。それを収集したEEMの活動と、国立民族学博物館創設にいたる経緯を、当時の記録をもとに紹介した。

第123回「ヒンドゥー教祭礼の読み解き方」【第92回民族学研修の旅関連】

2018年6月23日（土）講師 三尾 稔（民博教授） 参加人数 47名

ヒンドゥー教祭礼は神話上の出来事と生業のサイクルの節目におこなわれることが多い。インド北西部の祭事暦を例に、祭に込められた思い、人びとの願いについて考えた。

第124回「野次から応援へ——応援の比較文化論の試みから」

2018年12月8日（土）講師 丹羽典生（民博准教授） 参加人数 33名

応援はスポーツや政治の場などに見出すことができる。世界各地の応援の現場を、担い手やパフォーマンス、応援する組織の形成具合などに着目して紹介した。

第125回「米国先住民ホピの暮らしと世界観」

2019年3月9日（土）講師 伊藤敦規（民博准教授） 参加人数 44名

米国アリゾナ州のグランドキャニオンの近くに保留地を持つ先住民ホピ。資料解説映像をとおして、自然とともに暮らすホピの人びとの暮らしと世界観を紹介した。

●国立民族学博物館友の会 みんぱく見学会（協力：国立民族学博物館）

第71回 開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料」

2018年4月7日（土）講師 鈴木 紀（民博准教授） 参加人数 45名

第72回 特別展「工芸継承——東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」

2018年11月3日（土・祝）講師 日高真吾（民博准教授） 参加人数 40名

第73回 企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて——そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」

2018年12月1日（土）講師 踊 共二（武蔵大学教授） 参加人数 70名

第74回 朝鮮半島の文化展示場

2019年3月9日（土）講師 太田心平（民博准教授） 参加人数 30名

●国立民族学博物館友の会 体験セミナー

第78回 「世界の製藍、日本の藍染め——気候と風土に育まれた色、藍を知る」

実施日 ①2018年5月26日（土）②27日（日）[各1日間・滋賀県]

講師 井関和代（大阪芸術大学名誉教授）

協力 森 義男、森 芳範（紺九）

参加人数 5月26日 19名、5月27日 20名

世界中で親しまれる藍。滋賀県で紺屋と営んできた紺九を舞台に、世界各地の製藍と染料を得るための知恵をさぐり、藍染め体験を通して日本の藍について理解を深めた。

第79回 「富士山——信仰の世界」

実施日 2018年8月26日（日）～8月27日（月）[2日間 山梨県]

講師 秋道智彌（山梨県立富士山世界遺産センター所長、民博名誉教授）

参加人数 23名

災害をもたらすことから恐れられ、古くより山岳信仰の対象とされてきた富士山。世界遺産にも登録された富士

山の魅力を富士山信仰の世界からさぐった。

第80回 「長崎県、潜伏キリシタンの足跡を訪ねる——生月島、平戸島、上五島をめぐる」

実施日 2019年2月22日(金)～2月25日(月) [4日間 長崎県]

講師 宮崎賢太郎 (長崎純心大学客員教授)

参加人数 23名

カクレキリシタン組織がのこる生月島、キリスト教流入の地平戸島、多くの潜伏キリシタンが移り住んだ上五島を訪ね、キリシタンの歴史と現在の信仰のあり方をさぐった。

●**国立民族学博物館友の会 民族学研修の旅**

第91回 「モンゴル、遊牧の民に出会う——揺籃の地オルホン川上流域と草原都市ウランバートルを訪ねる」

※2017年度、参加希望者が多かったため再度実施。

実施期間 2018年8月8日(水)～8月15日(水) [8日間・モンゴル国]

講師 小長谷有紀 (民博教授)

イチンホルローギーン・ルハグワスレン (モンゴル科学技術大学教授)

参加人数 17名

遊牧民の興亡の歴史を物語る史跡が点在するオルホン川上流域、国の人口の半数が暮らす首都ウランバートルを訪ね、歴史背景とともに遊牧民の暮らしについて理解を深めた。

第92回 「融合と共存の北西インドをゆく——女神信仰とインド叙事詩の祭礼の期間を訪ねる」

実施期間 2018年10月13日(土)～10月22日(月) [10日間：インド]

講師 三尾 稔 (民博教授)

参加人数 16名

雨季明けにおこなわれるふたつのヒンドゥー教祭礼にあわせて現地へ赴き、諸勢力の興亡を物語る史跡や信仰の異なる宗教施設を訪ね、人びとの多様な価値観をさぐった。

●**国立民族学博物館友の会 午餐会**

第203回 「人類がつくりだした巨大な祭典、万国博覧会——知的貢献の可能性をめぐって」

実施日 2018年7月12日(木)

講師 中牧弘允 (千里文化財団理事長、吹田市立博物館長、民博名誉教授)

参加人数 21名

人類がつくりだした巨大な祭典、万国博覧会の現代的な意味とともに、2025年の万博開催の意義について考えた。

●**阪急生活楽校連携事業 講演会「世界遺産マチュ・ピチュ——神秘のベールを剥ぐ」**

実施日 2018年11月26日(月)

講師 関 雄二 (民博教授)

会場 阪急うめだ本店

主催 阪急うめだ本店、千里文化財団

参加人数 54名

日本人に馴染み深いインカ帝国時代の遺跡マチュ・ピチュ。遺跡の担った役割や探検家による発見の経緯、地元住民と世界遺産との関係などを紹介した。

●**『季刊民族学』(国立民族学博物館友の会 機関誌)**

協力：国立民族学博物館

編集・発行：千里文化財団

164号：特集「モンゴル仏教と化身ラマ——あるいは生まれ変わりの人類学」ほか (2018年4月25日発行)

165号：特集「岡本太郎の民族学」ほか (2018年7月25日発行)

166号：特集「旅する楽器——南アジアの弦楽器」ほか (2018年10月25日発行)

167号：特集「二つの顔をもつ山——世界遺産・富士山」ほか (2019年1月25日発行)

●みんぱくに集積された資料と情報を活用した出前授業プログラム

プログラム：風呂敷を使って、包んでみよう

日時：2018年8月31日(金) ※2クラス、2コマ担当した。

開催場所：大阪市立加美東小学校 対象：小学校2年生

参加人数：70名 (35名×2クラス)

●巡回展「国立民族学博物館コレクション ビーズ—つなぐ・かざる・みせる」

名称：ドルフィン・メイトこども園プレゼンツ／39オリエント／RSK テレビ60周年

国立民族学博物館コレクション ビーズ—つなぐ・かざる・みせる

主催：岡山市立オリエント美術館 国立民族学博物館 RSK 山陽放送 千里文化財団

開催期間：2018年9月22日(土)～11月25日(日) (56日間)

会場：岡山市立オリエント美術館〈岡山市北区天神町9-31〉

展示点数：計449点

(岡山市立オリエント美術館資料87点、他ミュージアム・個人所蔵資料126点含む)

企画：国立民族学博物館

特別協賛：ドルフィン・メイトこども園

後援：岡山県、岡山県教育委員会、岡山市、岡山市連合町内会、岡山市連合婦人会、岡山市PTA協議会、公益社団法人岡山県文化連盟、岡山オリエント協会、岡山市立オリエント美術館友の会、山陽新聞社、朝日新聞岡山総局、読売新聞岡山支局、毎日新聞岡山支局、中国新聞備後本社

入場者数：7,205人

関連事業

・ギャラリートーク

オリエント美術館担当学芸員のギャラリートーク

解説：須藤寛史(オリエント美術館)

開催日：9月22日(土) 参加人数：28名

10月13日(土) 参加人数：10名

10月27日(土) 参加人数：16名

11月10日(土) 参加人数：14名

展示企画者によるギャラリートーク

解説：池谷和信(国立民族学博物館)

開催日：11月4日(土) 参加人数：28名

・ワークショップ

「マールブルビーズを作ろう！／円筒印章を作ろう！」

講師：オリエント美術館館員

開催日：9月22日(土) 参加人数：30名

「マールブルビーズを作ろう！／世界のネックレス試着」

講師：オリエント美術館館員

開催日：10月6日(土) 参加人数：47名

ビーズ体験ワークショップ「粘土で作ろう！トンボ玉」

講師：高見 妙(古代オリエント博物館教育普及員)

開催日：10月20日(日) 参加人数：53名

ビーズ体験ワークショップ「ビーズで作ろう！ビーズワーク体験」

講師：笠原 リカ(岡山県職員)

開催日：10月28日(日) 参加人数：20名

「粘土で作ろうトンボ玉！」

講師：オリエント美術館館員

開催日：11月3日(土) 参加人数：35名

開催日：11月17日(土) 参加人数：40名

●講演会等

講演会：世界のビーズ講座第1回
「装身具から見た社会——南アジアのカーネリアン・ロードを巡って」

講師：遠藤 仁（人間文化研究機構／秋田大学研究員）

開催日：9月29日（土）

参加人数：28名

講演会：世界のビーズ講座第2回
「人間にとってビーズとは何か？——つなぐ・かざる・みせる」

講師：池谷和信（国立民族学博物館）

開催日：10月27日（土）

参加人数：48名

シンポジウム：世界のビーズ講座特別版
「人類とビーズ文化、文明のビーズ——縄文、エジプト、現代社会」

講師：池谷和信（国立民族学博物館）、松本直子（岡山大学）、山花京子（東海大学）

開催日：11月4日（日）

参加人数：41名

トークイベント：みんなく友の会・オリ美友の会相互企画
「時と場所をつなぐビーズ」

実施日：2018年11月25日（日）

話者：四角隆二（岡山市立オリエント美術館）、坂 憲一（トーホー株式会社）、
池谷和信（国立民族学博物館）

会場：岡山市立オリエント美術館

主催：岡山市立オリエント美術館、人間文化研究機構北東アジア地域研究拠点、千里文化財団

参加人数：65名（うち友の会受付5名）

岡山市立オリエント美術館で開催された展覧会「ビーズ」にあわせ、展覧会企画者、古代ガラス研究者、ガラスビーズ開発の専門家による個別発表、鼎談を実施。古代から現代にいたるガラスとビーズの潮流を概観した。

●そのほか、普及活動

① 国立民族学博物館オリジナルグッズの制作及び頒布

- (1) 仮面Tシャツ（新色：Deep Purple）
- (2) チケットホルダー 4種（企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて」関連グッズ）
- (3) クリアファイルA4 2種（特別展「工芸継承」関連グッズ）
- (4) A5 ポケットクリアファイル 2種（特別展「子ども／おもちゃ」関連グッズ）
- (5) 缶パン 2種（特別展「子ども／おもちゃ」関連グッズ）
- (6) 福笑いTシャツ 1種（特別展「子ども／おもちゃ」関連グッズ）
- (7) 双六キャンバスバッグ 3色（特別展「子ども／おもちゃ」関連グッズ）
- (8) 仮面手拭い 2種
- (9) ボールペン 1種

② 2019年国立民族学博物館オリジナルカレンダー「アーミッシュ・キルトを訪ねて」の制作及び頒布

③ 外部連携事業

1. 巡回展「ビーズ」での委託販売
 - ・会場：岡山市立オリエント美術館
 - ・期間：9月22日（土）～11月25日（日）
2. 「Inforest すいた みんなくフェア」への協力（特別展「子ども／おもちゃの博覧会」の広報）
 - ・開催期間：2018年3月24日（土）～4月30日（月・祝）
 - ・開催場所：ららぽーと EXPOCITY 内 Inforest すいた

- 協力内容：仮面キフェベのレプリカ・ガネーシャ木彫、オリジナルグッズ（Tシャツ・クリアファイルなど）の貸出・展示